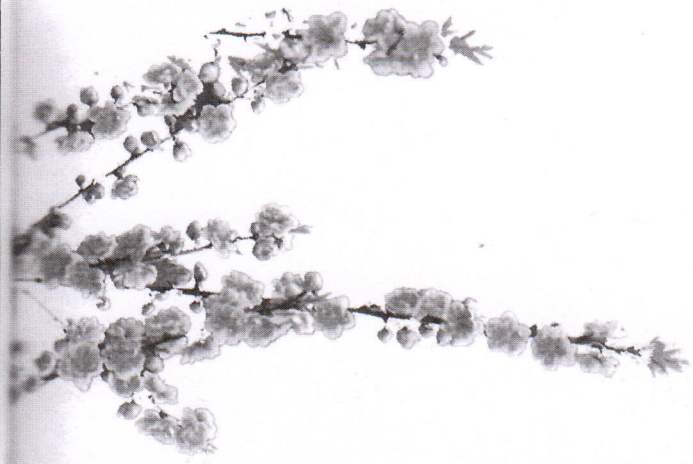

北京日本学研究中心

日本学研究

二十一

學苑出版社

日本语教育

学生の相互評価が発表意識及び発表効果に及ぼす影響
——日本語専攻出身の大学院生を対象に …… 朱桂荣/159
中国の日本語専攻教育における「敬語教育」に関する考察
——学習者へのインタビューと教科書分析を中心に …… 任麗潔/171
言語運用能力の向上を目指した教室活動の改善
——大学における第2外国語としての日本語(初級)の場合 …… 侯麗頴/188

日本文学

有吉佐和子眼中的人民公社
——浅析《有吉佐和子的中国报告》 …… 杨珍珍/200
论川端康成文学的救赎性格…… 肖　霞/208
城山三郎『素直な戦士たち』における宗教的境地…… 德永光展/219
动画片《悬崖上的金鱼姬》的互文性
——在东西方文化史中的解读 …… 秦　刚/231
『伽婢子』における時間設定の意味…… 卢俊伟/242
平安朝文学中的“蛛丝”…… 梁　青/252

日本文化

思想問題としての「日本学」…… 張彦麗/263
1945年以前日本的《老子》研究 …… 郭永恩/270
老方对若方
——『吾妻鏡』建暦二年十一月八日条を繞りて …… アダム・ベドゥナルチク/278
古代日本天皇家の乳母の系譜…… 潘　蕾/285
中国の天狗と日本の天狗…… 王　鑫/300
日本电影中的大众演剧要素…… 吴咏梅/314

日本社会

循環型社会づくりに向けた日本のごみ有料化についての研究…… 王　猛/330
关于日语专业学生就业意识的实证研究
——影响学生选择日企的因素初探 …… 张　弢　窦心浩/344

老方対若方

——『吾妻鏡』建暦二年十一月八日条を繞りて

アダム・ベドゥナルチク　ニコラウス・コペルニクス
大学文献学部日本言語文化研究室、トルン(ポーランド)

Abstract: The entry on the 8th day of the 11th month of Kenryaku 2(1212)in Azuma Kagami provides a brief description of eawase(painting contest). This kind of refined event originally held at the Heian court -as we can read in historical documents-was, however, organized by the samurai class too. This paper discusses an eawase held by shogun Minamoto no Sanetomo, its course and theme of contest's entries. Moreover, it is also an attempt to answer the questions about interrelations between eawase and sōshiawase, and as to the meaning of such events in young shogun Sanetomo's life.

Keyword:『吾妻鏡』　源実朝　絵合

はじめに

鎌倉時代に入ると、日本最初の武家政権が成立したと同時に、新しい武士文化も生まれた。武士文化が普及しはじめたと言っても、愈々地方への文化浸透は、依然として規範となった宮廷の貴族社会の文化と結び付いていた。この趨勢は、単なる王朝文化の懐古ではなく、様々な武芸を実践する以外に、武士は都で行った盛んな文芸や文化的行事も高く評価していた。また、西山松之助(西山 1996:585－592)が提案した行動文化論によって、武士は貴族文化の伝統を受け継ぐ遊芸の新しい「演者」と「鑑賞者」となった[1]。武士達は元来、武芸の職人であったため、荒々しく競いあうものなどを行い、宮廷貴族とはかなり異なった遊びに興じていた(増川 2000:65)という考え方は誤解でない。しかし、その競いあうものは、貴族社会の間で流行った物合という優雅な遊戯または遊芸にも関わっている。本小稿では、『吾妻鏡』の建暦二年十一月八日の件を中心とし、鎌倉幕府第三代征夷大将軍である源実朝の主催した「繪合之儀」について一考してみたい。

1. 源実朝の文芸・遊芸に対する興味

王朝文化が鎌倉幕府の成立を受け、それを包み込むような形で展開していったのに対して、東国ではその王朝の文化を受容しながら新たな動きへと向かった。源頼朝(在職 1192～1199)の時、いわゆる「館の文化」[2]と王朝文化の融合が出現した後、

王朝文化の幕府への影響を決定付けたのは、実朝の御台所として坊門信清の娘[3]で、後鳥羽上皇から寵愛された西御方の娘を京都から迎えたことである。それを機に実朝の周辺には京の文化が一気に流入していた。

王朝文化への実朝の関心は幼い頃から受けられていた修学にも関わると考えられている。すでに十三歳で、実朝は相模権守中章を師として基礎教育、つまり「将軍家御読書(孝経)」を始め、仏教についての講説を受けていた[4]。十九歳の実朝は、史上の事態、文化財または十七条の憲法等に対する興味を持ち、将軍のために必要な学問を身につけていたが、殊に風雅な文化や和歌へ沈溺したことが顕著である[5]。木内によれば、特に歌人としての実朝は父頼朝を越え、回数の多い和歌会の主催者であったのである(木内 1960:27－39)。

さらに、将軍実朝は、絵画に対する関心もあったと考えられる。土御門天皇元久元年に、少年の実朝が京都の画工に「将門合戦絵」を描かせた[6]。また、その事件の五年後、都から「奥州十二年合戦絵」を取り寄せて一覧し、『吾妻鏡』の承元四年十月十五日の条に「奥州十二年合戦繪 自京都被召下之 今日御覧 仲業依仰讀申 其詞云々」と記されているのによると、中原仲業に詞書を読ませたことがある。将軍実朝にとっては、この歴史的な諸事を語るものは、前九年後三年の役で戦った祖先に関する作品であるが、木内が注目したように、「京都から取り寄せられた辺りに、単に話を聞く程度の事で満足しなかったものと見るべき」であろう(木内 1960:24)。

将軍頼朝は、彼の文芸・遊芸に対する興味を考えてみると、後鳥羽上皇の遊芸に対する愛好の影響も受けたかもしれない。あるいは将軍が都の貴族文化に惹かれること、文芸に専念していたと思われるもう一つのきっかけは、実朝は、特に将軍職の中期頃、現実への希望を全く失ってしまったことにあるようだ(山下 1980:117)。それは、建暦三年の故畠山次郎重忠の末子である大夫阿闍梨重慶の斬殺事件の後、長沼五郎宗政は実朝に対して、頼朝公の頃は武備を重視したが、今は蹴鞠や和歌等のような風流な遊芸が中心で、武芸を止めた同然、女性が中心であって勇士は無い等のような不満、批判的な言辞を示したことから分かる[7]。

2.「御所繪合之儀」

本来、平安京の宮廷で催されていた遊芸に対する実朝の感心は、それの一例として建永二年三月に御所で行われた闘鶏の会や建暦二年三月から開かれている毎月三回、旬の鞠会などが挙げられる。また、同年八月には北面の三間所を学問所として近習の壮士に詰めさせるが、同年十一月八日の条に、

> 於御所繪合之儀有。以男女老若、相分左右、被決勝負。此事、自八月上旬、有沙汰之間、面面結構尤甚。或自京都尋之、或態令圖風情。廣元朝臣獻覧繪者、圖小野小町一期盛衰事。朝光分繪者、吾朝四大師傳也。數巻之中此兩部頻及御自愛仍老方勝訖云々(『吾妻鏡』1926:171)

とある。これによると、将軍実朝の「於二御所一繪合之儀有」った。「繪合之儀」ある

いは従来の絵合とは、平安中期から行われた物合の一種で、左右二組に分かれて判者を定め、それぞれの組から提出された絵画について討議し、その優劣を競い合った遊戯をさす言葉である[8]。また、「此事、自八月上旬、有沙汰」をみると、この行事は約半年前に計画されていたため、大規模な催し物だったと考えられる。

なお、建暦二年十一月八日の絵合の様子や雰囲気については、同月十四日条にも記述されている。

> 八日繪合事、負方獻所課。又召進遊女等。是皆摸兒童之形、評文水干、付紅葉菊花等著之。各郢律盡曲。此上、堪藝若少之類、及延年云々(『吾妻鏡』1926:171－172)

この行事の経緯は、以下のようなことが明らかになっている。

一、絵巻の注文などの絵合に対する準備は少なくとも五ヶ月前に始まったと推知できる。原文に従って、都に誂えられた絵画は、すでに建暦二年八月下旬頃から沙汰だったそうである。

一、絵合の負勝の成果を判定した者は、原文に詳細に記述されていないが、将軍が自ら判者であったと考えられる。

一、「以男女老若、相分左右」云々によると、年取った人と若者という多くの絵合の参加者たちは二組を作り、勝負を争った。

一、出品物として取り寄せられた数巻の絵画は、おそらく絵巻の形式で作られただろう。大江広元の方は「小野小町一期盛衰事」を絵画化したものを出陳した。結城(小山)朝光の方は「吾朝」の四大師の伝を描いたものを準備して出した。この絵巻以外については『吾妻鏡』が明らかにせず、他の資料文献においても見出せないのである。しかし、具体的に称されたこの二つの作品が「數巻之中」の一部となっていたという事実は明確である。

一、また、「此兩部、頻及御自愛」と「仍老方勝」という記述によれば、絵合で提出された全ての作品は興味深かったが、勝ったのは老方である。

一、「八日繪合事」の後、負けた方、すなわち若方(おそらく朝光の組)、は「所課」を献上した。

一、それから、実朝将軍が宴会を開催した。その宴の時、紅葉や菊花で装飾された評文の水干を着た遊女などは「兒童之形」を模し、各々雅やかな郢曲をつくした。また、稚児が高音で謡った堪芸の延年が演奏されただろう。

3.「小野小町一期盛衰事」の画

絵合で優勝を獲得したと思われる広元の方の「小野小町一期盛衰事」の画[9]は、渡辺(渡辺 1983:84)、西山(西山 2008:126)によると、空海の著作とされる『玉造小町壮衰書』を絵画化したものである。栃尾の解説によれば、『壮衰書』は最初に「玉造小町」を冠することがなかった(「女人壮衰書」と称したものと考えられる)。しかし、陸奥出羽国々における小町の髑髏の伝説や『新勅撰集』所収の「湊入りの玉つくり江

にごく舟の音こそたてね君を恋ふれど」と『小町集』所収の「わすれやしにしと、ある君達ののたまへるに みちのくに玉つくり江にごく舟のほにこそいでね君をこふれど」という作品等によっては、『玉造小町子壮衰書』の題が生まれてきたものであろう(栃尾 1994:13)。

小野小町の衰老落魄譚[10]は、おそらく東北に誕生した後、平安後期から鎌倉初期の歌学書や説話集等[11]に受け続がれ、形が整っただろう。この伝説は、小町が陸奥に生まれ育ち、都で活躍し、老い耄れて故郷に戻り死を迎えたという根拠から生まれたもので、錦によると「小町だった生・老・病・死の一生が三つの部分に区切られている」のである(錦 2004:76)。『壮衰書』の冒頭部に描かれた老婆の玉造小町なる主人公の醜悪な形貌は、『大方等大集経』を参照すれば、餓鬼の形姿を模倣したものである。つまり、小町の極貧劣悪の姿[12]は、『仏説善悪因果経』式の考えに沿って、餓鬼に転生したように描き出された。また、玉造小町邸の贅美と山海の珍味の羅列などは、『正法念処経』や『仏説罪福報応経』を参考にすれば、小町が餓鬼道に堕ちるべき罪業の因として設定されたと考えられている(渡辺 1983:83)。現存する『九相絵』や聖衆来迎寺蔵六道絵の『人道不浄図』に描かれている小町の死体は、野原に棄てられて変色し、腐乱し、犬狼の餌となり、やがて白骨と化してゆくもので、その図柄は鎌倉時代の『小野小町壮衰絵巻』の内容と完全に一致するものである[13]。老方によって提出されたこの絵巻は、将軍が格別に愛玩したとして著名な「小野小町一期盛衰事」の画と同じものである。

4.「吾朝四大師傳」の画

朝光の方が陳列した「吾朝四大師傳」を絵画化したものの内容に関しては詳細が見られないが、黒川は『考古画譜』にて「四大師傳、漢文乃古刊本あり、頗古書なり、無レ繪、吾朝四大傳は、傳教、慈覺、智證、慈惠なり」[14]と記している(黒川 1910:241)。この四大師の伝を描いたものは建暦三年三月三十日の記事にも出現している。当時、実朝は鎌倉五山第三位の壽福寺を参詣した時、「吾朝四大師傳繪」を携え、信任が極めて篤い退耕行勇律師に見せた。行勇は「求法入宋之處々」を観たことについて、その銘字の誤等を直した。それについては、建暦三年三月三十日の条を引用してみよう。

> 將軍家、御參壽福寺。有御聽聞御法談等。又去年、朝光所進、吾朝大師傳繪、有御隨身、令覽行勇律師給。觀彼求法入宋之處々。就其銘字誤等、被直進之云々
> (『吾妻鏡』1926:184、傍点筆者付加)

正治期(1199～1201)に宋時代の中国に渡り学んだ栄西が鎌倉に下ってきた際、行勇はその門下となっているが、和田が注目しているように、弘法大師の流を継承し、したがって「四大師傳繪」の中には空海の絵伝が加わっていたものがあった可能性があると考えられている(和田 1928:37－38)。

5.「雙紙合會」と絵合

絵合の二ヵ月後、建暦三年正月十二日に、幕府御所で女房等主催の行事が行われた。『吾妻鏡』において以下のような記述がみられる。

幕府女房等、有雙紙合會。將軍家、令判之給云々(『吾妻鏡』1926:177)

この双紙合(または草子合)は絵を含んだ和歌集・物語・日記書の優劣を争った遊戯と考えられる。永承五年(1050年)に開催された麗景殿女御歌絵合の名称は、この歌絵合の記録を副文献資料と比較すると、『袋草紙』下巻、『八雲御抄』二巻、『和歌合略目録』に「正子内親王造紙合」と記されている。また、歌絵合の記録原文においても、「歌絵のかねの冊子…絵の冊子」などの記述をうかがうことができる。

絵合と同様に「雙紙合會」の判者は将軍であった。実朝は和歌の愛好家であったため、双紙合の出品物として和歌とその絵画化を含めていたものを判定していたかもしれない。また、三代将軍が歌絵にも関心を持っていた事実は、『吾妻鏡』にも暗示されている。建暦三年三月二十八日の条には、

長定朝臣、献繪二十箇巻。〈納蒔繪櫃〉古今以下、三代集中、撰女房作者、取其詠歌、並事書之意圖之。將軍家、甚御入興云々(『吾妻鏡』1926:184)

とある。その日、藤原長定朝臣が『古今和歌集』の中から女房の作者を選び、その詠歌の歌意を描いたもの二十巻を蒔絵櫃に納め、実朝に献上したことが分かる。

おわりに

『吾妻鏡』に記録された「繪合之儀」や「雙紙合會」は、源実朝の御所で流行った雑多な行事・遊芸の例だけでない。両者の物合が、武士の文化的生活は、どのように王朝文化に影響を及ぼされたかも示している。

また、御所での絵合の主題という側面を考えてみると、参加者両方が陳列した絵画は、仏教に密接に関連していた。これは、将軍が自分の将来に不安を感じたためだったかもしれない。巧みに画かれた四大師の絵伝を鑑賞した実朝は、一方では小町の極貧劣悪の姿を見ることもできた。このような絵画によって、若い将軍は世の中を発見していた。つまり、建暦二年十一月八日の絵合は、教化的な役割を果たしたことも言える。

「雙紙合會」のような遊芸は、和歌などの文芸と絵画との繋がりを深め、両者の交渉上重要な意味を持ったことが明らかであるが、正月十二日の双紙合に提出されたと思われる歌絵は、絵合の出品物に対して、実朝の興味に適ったのであろう。この遊戯は、教養と関係がなく、享楽のために殊に催された行事だったと考えられる。

注:

[1]ものを合せる遊びは、様々な時代によって多面的に行われ、遊戯や娯楽以外の比べあい、闘いあう行為、勝負に賭けられるものにも及している(増川 2000:263 - 268)。本来、このような遊

戯は、西山松之助が論じる貴族文化の流れとして概括した「遊芸」という範疇に入ってくると思われる。西山によると、遊芸は一定の法則にしたがって、演じたり、歌ったり、鞠を蹴ったりして遊ぶ芸である。しかし、その遊びに参加したものは、例外なく自分でその芸を演じる。また遊芸に演者と鑑賞者が存在するので、創造のプロセスと鑑賞のプロセスが同時平行的に進行し、同時に終了するという構造を持っている。日本の遊芸の系譜は大きく分類すれば、平安時代以来、貴族社会、上流社会に成立した遊芸の流れ、武家の世界に成立してきた武芸の流れ、江戸時代の町人文化、すなわち、庶民の間に成立した大衆芸能の流れの三つがある(西山1996:585－592)。

[2]頼朝の邸である大倉御所の文化という。最初に、大倉御所(館)を中心とした宗教空間が生まれ、成長していったのであるが、それらの寺社を飾るべく、都の文化が持ち込まれた。「館の文化」の特質は、御所の侍の役割がよく示す。つまり御所には後家人が集い、酒宴や歌舞、さらに武勇談に及ぶものを行ったのである(五味文彦2002:101－104)。

[3]坊門信子(1193～1274)は、源実朝の正室で、「西八条禅尼」と通称される。出家後の法名は「本覚尼」である。元久元年(1204年)に実朝の正室となって鎌倉に赴き、承久元年(1219年)に実朝が公暁によって暗殺されると寿福寺にて出家し、京に戻った。

[4]『吾妻鏡』建仁四年正月十二日の条および翌元久二年三月一日の条を参照。

[5]同書の承元四年十月十五日の条において「聖徳太子十七箇條憲法、并守屋逆臣跡收公田員數在所、及所被納置于天王寺法隆寺之重寶等記、將軍家、日來有御尋。廣元朝臣、相尋之、今日進覧云々」とある。

[6]同書の元久元年十一月廿六日の条に「將軍家、日來仰畫工、於京都被圖將門合戰繪、今日到來、掃部頭入道、所調進也。二十箇巻、納蒔繪櫃、殊御自愛云々」を参照(傍点筆者付加)。

[7]『吾妻鏡』建暦三年九月二十六日の条に「當代者、以歌鞠爲業、武藝似廢。以女姓爲宗、勇士如無之」を参照。

[8]もっと詳しく説明すれば、例えば『遊びの大辞典』においては、「絵合は、巻子や冊子の形式の絵の優劣を競う遊戯で、これも左右両方に分かれ、古画や新作の画を比べ合せた。絵には歌を題材とした絵、物語絵、日記絵、行事絵などがあり、画や書の名手の描いた古画や新しく書かせたものを準備し、双方から出しあい、その図柄、内容、技工、装飾などを判定の基準として優劣を判じた」という項目がある(『遊びの大辞典』1989:294)。

[9]建暦二年に、広元は六四歳で、朝光は四四歳であった。両者左右の方長であれば、老方が勝ったので、「小野小町一期盛衰事」を絵画化したものであったのだろうと考える。また、錦は「大江広元は「小野小町一期盛衰事」を描いた絵を持ち出して勝ちを得ている」と述べている(錦2004:78)。

[10]小野小町伝説の一つであるが、細川は、円地の分類に従って、次の六つの伝説題を挙げている:①絶世の美人として小町、②男性を翻弄し、思いを叶えよう約束し、男を悶死させたこと、③和歌の天才、④老後、容色衰頽し乞食姥となって巷を放浪したこと、⑤男と交わることのできぬ片輪として小町、⑥薄原の小町の髑髏。(細川1989:221)。

[11]『壮衰書』の書名が文献上に初出するのは『袋草紙』であるが、渡辺が注目したように、「その著者清軸は…玉造小町と小野小町と同定せず別人をも掲げているが、…既に両者の同一視する通行の理解があった」ことが窺える。『壮衰書』の本文の一部「左臂懸破筐」(「小野小町は臂に掛けけむ筐よりはめでたく」)を引く最も早いテクストは『無名草子』にある(渡辺1983:83－84)。

[12]『玉造小町子壮衰書』の序に「容貌顦顇。身体疲瘦。頭如二霜蓬一。膚似二凍梨一。骨竦筋

抗。面黒歯黄。裸形無レ衣。徒跣無レ履。(中略)糇糧己盡。朝夕之飡難レ支。糠粃悉畢。旦暮之命不レ知(後略)」とある(『玉造小町子壮衰書』1960:334)。

[13]徳江はすでに1976年に小野小町一期盛衰の絵巻に関して、現存する『小野小町壮衰絵巻』(『九相詩絵巻』)ではなかろうかと推測した(徳江 1976:104－105)。

[14]春村が列挙した大師は所謂「天台宗の四人大師」以外に平安時代の四人の大師:伝教大師(最澄)・弘法大師(空海)・慈覚大師(円仁)・智証大師(円珍)が見られる。

参考文献:

『遊びの大辞典』. 1989. 増田靖弘(編). 東京書籍

『吾妻鏡』第四. 1926. 日本古典全集第一回. 與謝野寛[他]編. 日本古典全集刊行会. 木内一夫. 1960. 「源実朝と和歌—吾妻鏡を中心として—」. 『国学院雑誌』. 61(4). p27－39

黒川真頼『訂正増補考古画譜』. 1910. 黒川真頼全集 1. 国書刊行会

五味文彦・佐野みどり・松岡心平. 2002. 『中世文化の美と力』. 日本の中世 7. 中央公論社

『玉造小町子壮衰書』. 1960. 群書類従第 9 輯. 文筆部巻第 136. 塙保己一(編). 続群書類従完成會

徳江元正. 1976. 『芸能、能芸』. 三弥井書店

栃尾武. 1994. 『玉造小町子壮衰書:小野小町物語』. 岩波書店

錦仁. 2004. 「小町の衰老落魄譚」. 『国文学 解釈と鑑賞』(特集:「女性と仏教」). 69(6). p73－81

西山松之助. 1996. 「近世芸道思想の特質とその展開」. 『近世芸道論「芸の思想・道の思想—6」』. p585－592、岩波書店

西山美香. 2008. 「九相図の展開—小野小町と檀林皇后の〈死の物語〉」. 『国文学 解釈と鑑賞』(特集:「絵画を読み解く—文学の邂逅」). 73(12). p120－127

細川涼一. 1989. 『女の中世—小野小町・巴・その他』. 日本エディタースクール出版部

増川宏一. 2000. 『合せもの』. ものと人間の文化史 94. 法政大学出版

山下純子. 1980. 「鎌倉初期の時代における源実朝」. 『武蔵野音楽大学研究紀要』. 13. p113－121

和田英松. 1928. 「絵合に就いて(上)」. 『國華』. 447. p33－38

渡辺秀夫. 1983. 「小野小町:愛の地獄—『玉造小町子壮衰書』」. 『国文学 解釈と教材の研究』. 28(9). p80－84